

### 39. Lung Cancer in Chronic Interstitial Pneumonia : Early Manifestation From Serial CT Observations

#### 間質性肺炎に合併する肺癌の形態的・局在性の特徴：その初期像について

獨協医科大学放射線医学

吉田理佳, 石川 勉, 楳 靖

【目的】間質性肺炎 (IP) に合併する肺癌の初期像の特徴を明らかにする。

方法：間質性肺炎経過観察中の患者のうち1999年から2010年に肺癌と診断され、初回CTで癌が無いことが確認されている22名(23病変)を対象とした。2名の放射線専門医が独立して後ろ向きにCT画像を参照した。

【結果】経過観察期間は4.1年、CT撮影回数は8回、腫瘍径は陰影出現時11mm、生検診断時22mm、陰影出現から臨床的診断日までは409日であった(いずれも中央値)。発生部位は、15病変(65.2%)は線維性嚢包(蜂巢肺や傍隔壁肺気腫)と正常肺の境界に生じ、4病変はすりガラス影内、1病変は蜂巢肺内に生じた。形状は12病変 round or oval, 8病変 ill-defined stellate shape, 2病変 band-like, 1病変は境界不明瞭な肺野濃度上昇であった。

【考察】これまでの間質性肺炎に合併する肺癌は肺の辺縁に多く、病理組織型で扁平上皮癌、腺癌が多いとされている。今回も同様の傾向であった。また形状もこれまでの報告と同様の傾向であった。

【結論】IP合併肺癌の初期像は、約2分の1の病変はstellate shapeやband-likeで初期は腫瘍として認識することが難しい。大部分の腫瘍は蜂巢肺と正常肺の境界に生じ、蜂巢肺内に生ずることは稀である。

### 40. 高浸潤性頭頸部癌モデルの作成とその生物学的特性について

獨協医科大学耳鼻咽喉・頭頸部外科学

金谷洋明, 今野 渉, 後藤一貴, 中島逸男, 平林秀樹, 春名真一

【目的】頭頸部癌のほとんどは扁平上皮癌であり、周囲組織に対して浸潤性に増殖する。その浸潤能は、病変の再発を繰り返すごとに高度となっていくことを日常診療にて経験する。今回、浸潤能を高めた細胞集団を実験的に作製した。これを実験モデルとして、高浸潤性癌細胞の生物学的な性質の検討を試みた。

【方法】当科にて樹立した頭頸部扁平上皮癌培養細胞であるDHN1株を用いた。MatriGel® invasion chamber内にて培養し、浸潤性を有する細胞集団のみをsubcloneとして分別、採取した。採取した細胞を増殖させ、同様の処理を12回繰り返した。最終的にDHN1 parental cellとsubclone 1~12の13種類の細胞を得た。それぞれの細胞について、①培養形態の変化、②増殖曲線、③invasion assay、④E-Cadherinの発現、につき比較検討した。

【結果】①DHN Parental cellは、扁平上皮癌においてみられる典型的な敷石状の培養形態を示した。Subcloneでは敷石状形態が不明瞭となり、疎なりボン状の細胞配列を示すようになった。②Parental cellに比べ、subcloneの増殖は速い傾向にあった。③Invasion chamberを用い、浸潤を示した細胞のみ観察した。SubcloneではInvasive activityは徐々に高まる傾向にあった。④細胞間の接着に関与するE-Cadherinの発現は、徐々に弱まることが観察された。

【考察】高浸潤性subcloneでは、培養形態において細胞間の結合が乏しくなり、細胞間接着に関与するE-Cadherinの発現も弱まっていった。細胞同士が集塊を形成する傾向がなくなり、扁平上皮癌培養細胞が徐々に浸潤に適した生物学的特徴を獲得し得る過程が示された。